

[成果情報名]カキ「太秋」のジョイント栽培用大苗生産方法

[要約] 幼苗接ぎ木した1年生苗を2年目に13号鉢あるいは10号鉢で育苗すると「アオソ」台の大苗は樹高150cmを超える。「法蓮坊」台や「太月」台では13号鉢で育苗するか、10号鉢でも多灌水を行うことで大苗は樹高150cmを超える。

[キーワード] カキ、太秋、ジョイント仕立て、大苗育苗

[担当] 果樹・薬草研究センター

[分類] 普及・行政・教育の参考となる技術情報

[背景・目的]

県内のカキ産地では成木の樹高が約3mと高く、作業性が悪いことから、低樹高化による軽労化が求められている。また、当県の甘ガキ品種は「富有」に偏っており、新しい品種の導入が求められている。「太秋」は消費者に好まれる甘ガキ品種であるが、樹勢が弱くなると雄花の着生が多くなり、収量が少なくなるため、生産は拡大していない。

福岡県では、密植した樹同士を低い位置で連結するジョイント栽培により「太秋」の収量の確保と作業の軽労化を両立する技術が開発されて普及しており、当県の産地へ導入できる可能性がある。

しかし、ジョイント栽培する場合は苗を定植後に高さ50cmで折り曲げる必要があり、株間100cmとすると最低でも150cmの樹高が必要である。一方、通常販売されている断根されたカキ苗は長さが120cmと短く、ジョイント栽培に利用できない。

そこで、「太秋」について当県が開発した幼苗接ぎ木と大苗育苗技術を用いて、2年間で樹高150cmを超える大苗の生産方法を確認するため、台木の種類、大苗育苗時の鉢の大きさ、および灌水量を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 育苗1年目は1月に10～12℃に加温したハウス内で台木の種子を播種する。実生苗は3月下旬から4月上旬にメトロミックスを用土として4号ポリポットに鉢上げする。実生苗を台木、「太秋」を穂木として6～7月に幼苗接ぎ木を行い、活着苗は8月にピートモス：バーミキュライトを等容積混合した用土（以下、用土）で6号プラ鉢に鉢上げする。
2. 育苗2年目は4月上中旬に13号（培土容量20L）または10号（培土容量9.6L）のプラ鉢に用土で鉢上げし、表のとおり灌水と施肥を行う。
3. 「アオソ」台では、鉢の大きさや灌水量に関係なく、2年間ポット育苗した大苗が樹高150cmを超える。
4. 「法蓮坊」台と「太月」台では、13号鉢で育苗した場合は灌水量に関係なく樹高150cmを超える。10号鉢で育苗した場合でも多灌水により樹高150cmを超える。
5. 13号鉢を用いて多灌水を行うと、いずれの台木でも樹高が200cm程度となり、より伸長した苗の生産が可能である。

[成果の活用面・留意点]

成果は2022年に果樹・薬草研究センター（五條市）の雨よけハウス内において実施した試験結果に基づく。

[具体的データ]

試験区		表 各処理区における灌水量と施肥量						
		灌水量 (L/日/鉢)			施肥日、使用肥料と施肥量 (N量g/鉢)			
		4月14日～ 7月21日	7月22日～ 9月22日	9月28日～ 12月23日	4月14日	7月4日		
灌水量	鉢の大きさ							
多灌水	13号	5.0	6.3	5.0	柿豊eco ^{※1}	3.0	エコロンク ^{※2} 100日 ^{※2}	7.0
	10号	2.6	3.3	2.6	〃	1.5	〃	3.5
少灌水	13号	2.5	3.3	2.5	〃	3.0	〃	7.0
	10号	1.3	1.7	1.3	〃	1.5	〃	3.5

※1 柿豊ecoの肥料成分量はN:P:K=9:7:7

※2 エコロンク^{※2} 100日の肥料成分量はN:P:K=14:11:13

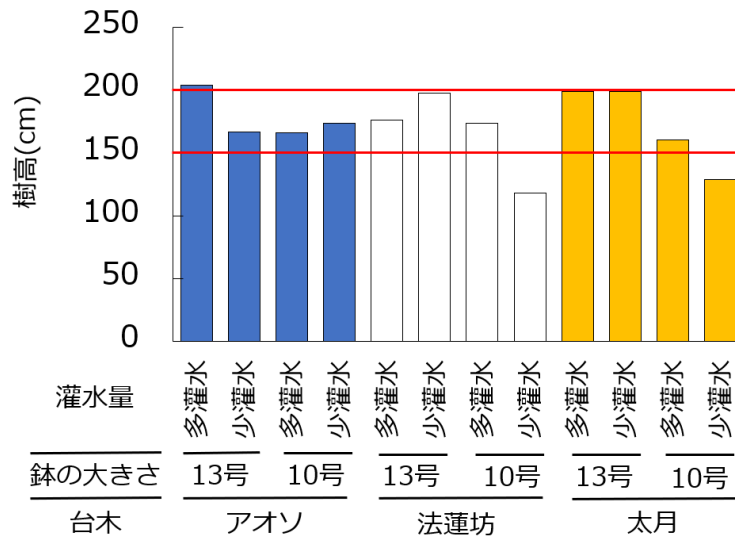


図1 台木、鉢の大きさおよび灌水量が「太秋」2年生苗の樹高に及ぼす影響 (n=2~3)



図2 樹高 200cm を超えた大苗 (いずれも 13 号鉢で育成)

[その他]

研究課題名：脚立を使わないカキの低木栽培技術の開発

予算区分・研究期間：県単 (2022年度)

研究担当者：倉田 淳、兵頭由浩、杉村輝彦

発表誌等：2023 年度奈良県農業研究開発センター成果発表会